# 不快画像に対する感情制御方略の比較検討

うつ病や不安症は感情障害として分類されているが，それぞれ異なる病態メカニズムが想定されている。一方で、これらの精神疾患には不快な感情を適応的に統制することが困難であるという感情制御の障害が見られる点で共通点がある。よって、適応的な感情制御は精神的健康に有用であり、その方略を多面的に検討することが必用である。従来の研究では状況や刺激、自らの心的状態に対する解釈を変化させることによって、感情の強度や種類を変化させる“再評価”が適応的な感情制御方略であることが知られている。一方で、再評価が意識的な感情制御の方略であるのに対して、近年は非意識的な感情制御方略として感情に名前をつける言語的ラベリングが不快感情の制御に有効であることが知られるようになった。そこで、本研究では感情制御の方略の一つである再評価を取り上げ、より効率的に再評価を遂行するために感情の言語的ラベリングを実施し、その効果と神経基盤を明らかにすることを目的として２つの研究を行った。

研究１では15名の研究参加者を募集し、fMRIによって不快感情を喚起する画像刺激を4s提示し、言語的ラベリングと再評価を同時に実施する条件と再評価を単独で遂行する条件を比較検討した。その結果、言語的ラベリングと再評価を同時に実施した場合には再評価単独条件と比較して、扁桃体の活動の減少と外側前頭前野の活動増加が見られた。このことから不快感情に対して言語的ラベリングを行うことで再評価に関わる脳機能の活動が増強することが示された。しかし、研究１ではfMRIの特性上、時系列的な脳機能の変化を検討できなかったため、時系列的な検討を行うために研究２では近赤外光トポグラフィーを用いた実験を行った。31名の研究参加者を募集し、研究１と同様に不快感情を喚起する画像刺激を提示し、言語的ラベリングと再評価を同時に実施する条件と再評価を単独で遂行する条件を比較検討した。ただし、画像刺激については脳機能の時系列的変化を検討するために10s提示し、それぞれの条件の遂行中の脳機能を近赤外光トポグラフィーで測定した。その結果、言語的ラベリングと再評価を同時に実施した場合には、画像刺激提示中ではなく画像刺激提示後10s間に右背外側前頭前野の活動が上昇することが示された。このことから、言語的ラベリングを再評価とともに行うことで感情制御が持続的に遂行される可能性が示唆された。

本修士論文では、上記の研究を通して感情制御の一つの方略である再評価の効率性を高めることを可能とする非意識的な感情制御の有効性を検討した。その結果、非意識的に行われるメカニズムとして外側前頭前野が感情制御の遂行を維持する役割を持つことが示唆された。